

1 岩手県滝沢市 滝沢市役所若者活躍推進室

「若い世代の行政参加の取り組みと評価について」

若者活躍を推進する政策で大きな違いは、岩手県立大学と盛岡大学があるということ。そしてすべての学生を「市民」として捉えた政策展開をしていたこと。大学の講義や実習、新入生オリエンテーションへ参加し、市の取り組み紹介をし惹きつける、政策提案したい人を逃さない活動支援は参考になった。さらに、学生が市民とつながり、まちづくりに関わる機会を設けるため、コアタイムや回数を制限しない「行政で学生アルバイト事業（会計年度任用）」も良い。事務補助ではなく学生の視点を取り入れて実施することが必要な業務（ふるさと CM、SNS 発信など）に就き運用している。ボランティアではなく、やらされる感ではなく、やれる時にやるという柔軟さを、職員も受け入れ運用している。学生がやりたいことをコラボする相手に、事業者だけでなく「役所」を組み込ませる。その取り組み姿勢がとても重要だと感じた。当町に大学はないが、学生を広域（信州大学や他高校）で捉えること、小中高生に「まちづくり行政」という選択肢を持たせる努力を、行政や町の大人がしていくことが重要だ。

2 岩手県滝沢市 ビッグルーフ滝沢

「大ホール、会議室、図書館、観光案内、産直、レストランなどの滝沢市交流拠点複合施設」

みのわ BASE より規模の大きな施設であるが、施設が複合していることに意味を感じた。観光で市を訪れた方々が消費する拠点でもあるとのこと。フリースペースの机や椅子も、木材だけでなく、畳を組み込んだ家具で、椅子の背面が本棚になっていたり、アイデア満載。安価だとしても（30円など）すべてを有料化しているところも大事だと感じた。

3 岩手県紫波郡紫波町 オガール企画合同会社

「オガール循環型まちづくり・環境コース」

数年前箕輪町に訪れていただいた、岡崎氏の仕掛けた官民連携によるまちづくりをした紫波町への視察は念願だった。JR 開通とともに再開発計画で所有して頓挫していた土地には、複数の施設が、暮らしに合わせて展開しており見事だった。印象的だったのは、その中心に「こどもたちのみらいに、環境をよりよい姿で紫波を残す」という意思が感じられたこと。図書館、保育園、広場だけでなく、生ゴミや間伐材などの資源を循環させる仕組みを構築している。公民が連携したとしても、行政の色（規制やルール）が濃いと、各施設がこんなに魅力的にはならない。「民営」は利用する側にも維持するための意識が生まれる。フットボール、バレーボールなどの普遍的集客を仕掛け、その周辺で利益を生む事業ができる環境づくりもまた循環である。少し離れた地区には、農と暮らすため、旧小学校を拠点に、戸建てや体験宿泊施設、体験農業と食を共にするノウルプロジェクトを施工していた。今後も注目したい町であった。

4 岩手県紫波郡紫波町 紫波町役場

「NFT を活用したデジタル戦略について」

地方が直面する少子高齢化や過疎化などの課題を解決するための Web3 のデジタル技術。ブロックチェーン

や NFT、メタバースを推進して新たなサービスを生み出し地域課題を解決する。この説明を理解するのに必死な世界だった。

この意識が必要だと感じたものは、DAO（Decentralized Autonomous Organization、分散型自律組織）。ブロックチェーンを活用した新しい組織形態で、従来の中央集権型組織ではなく、参加者同士が協力し合いながら組織運営を目指すもの。中央集権でなく意思決定を行える行政は今後必要と感じる。トークン（地域通貨？）発行による Help to Earn など、課題を自治体職員だけでなく住民がボランティアでなく、対価をトークン付与により解決する体制の構築も、今後必要だと感じた。人手不足、資金不足という不安を自治体自体が財源を作り循環させる発想をしていくべき。いずれも、大きく成功しているという印象は受けなかったが、こうして取り組んでみることを町もやるべき。

5 岩手盛岡市 木伏緑地

「公設の都市公園。公民連携・民間主導による管理」

対応いただいたのは、都市整備部公園みどり課の職員の方々。施策の熟知や方向性をしっかり持っていて、感心させられる説明ばかりだった。

①木伏緑地「公園活性化プラン」の事業化を断念した場所に、創設された Park-PFI 制度でを使い、行政にとっての目的「公衆用トイレ設置」を果たした事例。民間事業者のノウハウを活かして飲食店や売店等の公園施設の設置管理ができ得られる収益を公園整備に還元する。ここは、ゼロイチキュー合同会社が落札、コンテナハウスに複数のテナントが入るエリア、オープンスペース、アウトドアキッチンエリアから成り、地下に自転車駐車場が設置されていた。樹木が茂り鬱蒼としていた公園に、芝のオープンスペースが生み出され「公園の本来あるべき姿」が体现され、利用者も 1000 人を超えている。

②中央公園の目的は「保育園」。あそびを学び、学びをあそぶ」そのコンセプトにぶれないエリア展開だ。飲食棟、フリースクール、産直、地場産業がランドスケープデザインで調和して作られていた。住みたくなる価値を創出している。

全体を通じて

視察先のスケールは大きかったが、どの自治体もこれから先の在りたい未来の図が明確にあり、そのために、従来の自治体の体制やルールを変えて進んできたように見えた。

箕輪町は、何を目的にどんなまちづくりをしたいのか、どんな町の姿を未来に残すのか、町民とともに考え直す必要がある気がする。岩手は遠い地であるが、訪れた自治体は、風景、産物、人、どこも箕輪町に似ている。決して実現できない未来ではない。

公だけでつくる町にはもう限界がきている。公民の連携は、すぐにでも取り組むべきこと。

参画事業者がいるかどうかより、目的を果たすために民間を取り込む、行政本来のコア業務に集中できる体制をつくることに、できるだけ早く取り組むべきだろう。

研修や視察は、オンラインという選択肢もできる時代だが、やはりリアルで体験することには叶わない。遠方の視察を新幹線で行けたことを大変感謝している。